

見捨てられ妻なので離縁を決意したら
溺愛生活に突入しました！

イクセル

ディアナの幼馴染みで、
リンディス伯爵家の嫡男。
孤独だったディアナを公
私にわりと支えてきた。

オスカー

フィルベルドとディアナ
の新しい邸の執事。

王妃

ヴェレス王国の王妃。ク
レイグとアスランの母親。

ルトガー

第二騎士団の副団長。フィ
ルベルドの片腕として行動
を共にする有能な騎士。

アスラン
殿下

ヴェレス王国の第二王子。
フィルベルドの幼いころか
らの友達で、第二騎士団が
護衛する対象。

クレイグ
殿下

ヴェレス王国の第一王子
で、アスラン殿下の兄。

フィルベルド

次期公爵で、屈強な第二騎士団団長。
六年ぶりに帰国した途端、周囲が困惑
するほどディアナに甘く重い愛情を向
ける。だが、その一方で王宮の重大な
秘密に関わっていて――？

ディアナ

14歳で政略結婚でフィルベルドと結ば
れるが、夫の長期不在により、見捨てら
れ妻として孤独な六年間を過ごした。
再会が叶わなかったことをきっかけに
離縁を決意。健気で純粋な性格。

プロローグ

ヴェレス王国の公爵家の一つであるアクスウィス公爵家。

この国では、結婚は貴族なら十四歳からできる。若く結婚しても、すぐに跡取り問題には突入しないけれど、家と家が繋がることに変わりはない。貴族同士の結婚は、家と家の繋がりを強化するには有効で、さらに格差結婚なら資金援助も受けやすいのだ。

スウェル子爵家も、援助が目的で一人娘の私——ダイアナ・スウェル十四歳が、十八歳の次期公爵であるフィルベルド様と結婚することになった。

お父様に連れられてアクスウィス公爵邸に着くと、公爵家一同に出迎えられた。

当主であるアクスウィス公爵様を先頭に、隣には金髪碧眼の若い男性。二人の背後には、使用人がずらりと並んでいる。

（本当に、私はこんな立派な家の方と結婚するのかしら……）

馬車を降りると、お父様に続いてアクスウィス公爵様に膝を曲げて挨拶をした。あまりにも豪華な邸と使用人の数に圧倒されて、公爵邸を呆然と見渡した。

「初めまして、ダイアナ嬢。フィルベルド・アクスウィスです」

「は、はい」

目の前に立っている夫となるフィルベルド様に声をかけられて、ハツとした。慌てて返事をして、すぐに挨拶のために手を差し出した。

背の高いフィルベルド様が少しだけ屈^{かが}んで、背の低い私の手を取り指にキスをする。その仕草が大人っぽくて、自分まで大人になった気がして胸が高鳴った。

フィルベルド様を見ると、サラサラした金髪^{きんぱつ}が光って眩^{まぶ}しい。彼が顔を上げると、真剣な眼差^{まなざ}しと目が合った。

初めてお会いした見目麗しい夫はにこりともせず、冷たくて怖い印象だった。

挨拶が終わってから、アクスウィス公爵家の広い書斎部屋に案内された。テーブルを挟んだソファに向かい合って座りちらりとフィルベルド様を見ると、透き通るような冷めた碧眼^{へきがん}と目が合い、ビクッと肩が揺れてしまう。

落ち着き払った彼の様子に、この結婚が白い結婚だと予感した。

お父様たちは、別のソファに腰かけて軽快に話している。重苦しい空気なのは、ここだけだ。

お父様は、アクスウィス公爵家から結婚を機に援助を受けることになりご機嫌そのもの。意外にもアクスウィス公爵様も結婚には賛成の様子でご機嫌だった。そんな彼がふと私たちの様子に気づいて、怪訝^{けげん}な表情になる。息子の愛想のなさ^{あき}に呆^{あき}れかえっているのだ。

「フィルベルド。ディアナ嬢に庭園でも案内してやりなさい」

「……はい」

私とフィルベルド様の静寂の空気を読んだアクスウィス公爵様が言うと、フィルベルド様はつまらなそうに返事をして立ち上がった。それに合わせて私も立ち上がった。

「……こちらに」

「はい」

無愛想なフィルベルド様の後ろについて行くと、緑の芝生が敷かれた広大な庭に出た。柔らかな風が吹くと、甘くて優雅な花の香りが鼻腔^{びくう}をくすぐる。

（それにしても、庭まで広い……）

どこまで行くのだろうと思っていたら、バラのアーチが見えてきた。その先には一面に咲き誇るバラの花。驚きのあまりに私は立ち止まり、口を開けたまま呆^{ぼろ}けてしまった。

ハツと気づくとフィルベルド様はすでにバラのアーチをくぐっていて、慌てて後を追う。

（——綺麗^{きれ}い）

アーチをくぐれば、周りの見事なバラに思わず笑み^{こぼ}が溢^{あふ}れて足が自然と止まった。

「……ディアナ」

「は、はい。なんでしょうか？」

不意に名前を呼ばれて声が上がった。

「俺は、しばらく仕事でアクスウィス公爵邸には帰らない。あとで君のお父上からも聞くとと思うが、結婚といっても君と一緒に住めない。どうしても、この邸^{やしき}に住みたいなら許可はするが、まだ君は若いからお父上のいる実家にいるのがいいだろう」

フィルベルド様が冷たく言い放った。

結婚しても一緒に住まない夫。援助を受ける立場の我がスウェル子爵家に利こそあれ、彼が一体なんのために結婚するのか不思議で首を傾^{かじ}げた。

「そうですか。大変ですね……でもお仕事なら仕方ありません。私は、実家にいることにします。決してお邪魔しませんので、どうぞ頑張ってください」

「……………」

フィルベルド様は私を見て、眉間にシワを寄せていた顔を少しだけ緩ませて無言になる。笑っている緩みじゃない。どちらかというと、驚いているように見える。呪いでもかけられているのかと思うほど、冷たい表情は変わらない。

その顔が怖くて、そばにある大輪のバラに目を移した。怖い顔を見るよりも、絶対にこっちの綺麗なバラを見ている方がいい。

どのみち結婚しても、私は十四歳だから妻の役割は果たせない。お父様からすれば私が入籍さえしていればいいのだ。

今の私には、夫に期待するものは何もなかった。

「ディアナ」

「なんでしょうか？」

真っ赤なバラに夢中になって手を伸ばしていると、落ち着いた声で名前を呼ばれた。

少しだけ顔を向けると、フィルベルド様がハンカチを差し出している。

「……いいのですか？」

「結婚したのだから……その……」

この国では、結婚相手に家紋入りのハンカチを贈る風習がある。家紋だけじゃなくて、相手のイニシャルも一緒に刺しゅうしたものを渡すこともある。

フィルベルド様も、一応は私が結婚相手だと思っているらしいけど、ハンカチを渡す時まで無表情とは。でも、義務は果たそうとしてくれているのかもしれない、フィルベルド様から受け取ったハンカチを両手で持って笑顔を向けた。

「ありがとうございます。大事にしますね」

「そうか」

白いハンカチは、レースをあしらったものだった。もちろんアクスウィス公爵家の家紋がバッチリ入っている。

本当なら妻も夫にハンカチを渡さないといけないけど、急に決まった結婚だったから、私は刺しゅうどころかハンカチ自体準備してない。なんだか申し訳なくなる。

「すみません。急なことでハンカチを準備してないのです……次はいつお会いできるかわからないですけど、今度お会いできたら必ずハンカチをお渡ししますね。約束します」

「そうか……」

ハンカチを握りしめて、フィルベルド様の怖い顔を頑張って見て言うと、彼の眉間のシワはいつの間にかなくなっていた。

この日から、私とフィルベルド様は六年間会うことはなかった。

第一章 壊れそうな夫の帰還と離縁したい妻

——ヴェレス王国の夜会。

平和で裕福なヴェレス王国は屈強で精悍な騎士たちが集まる騎士団が有名で、騎士の国と呼ばれるほど。フィルベルド様も騎士の一人だった。

その彼と今夜再会するために、私は会場の入り口で待っていた。

久しぶりの夜会は、いつ見ても煌びやかで豪華絢爛だった。夜会に相応しい深紅のドレスを着て、ラベンダーピンク色の髪は軽く結び、髪飾りで整えた。

心待ちにしていた再会の時を目の前にして、緊張しながらここまで来た。なのに……

「ディアナ・アクスウィス次期公爵夫人……お一人でございますか？」

出入り口から離れず待っている私に、会場のスタッフが声をかけてくる。その言葉に惨めさをかき立てられて、その場を去った。

たった一度しかお会いしたことのない、結婚して六年目の夫はいまだ姿を現さない。

夜会会場に一人で入る気にもなれなくてひと気のないバルコニーに出ると、風が冷たくてぶるつと身体が震えた。

「今日、やつとお会いできるはずだったのに……くしゅんっ……！」

フィルベルド様から、王宮が開催する夜会への招待状が届いたのは先月のこと。だから、会える

と思った。でも、会えないでいる。

「嫌なら、さっさと離縁してくれたらいいのに……」

ひんやりした風が吹き、鼻水がたらりと出た。少し風邪気味かなあ……と思いながらポケットからハンカチを出すと、アクスウィス公爵家の家紋の刺しゅうに目が留まる。

六年前、紙切れ一枚にサインしただけで私は結婚し、それから一度もフィルベルド様とお会いすることがなかった。

バラの庭園では顔が怖くてあまり見ないようにしていたから、彼のことは金髪碧眼だったとしか覚えていない。

『どんな顔だったかしら？』とお父様に尋ねたこともあったけど『いずれまた会える。サプライズだと思えばいいじゃないか』と笑っていた。だけど、そんなサプライズはいらない。

そのお父様は、二年前に馬車の事故で他界した。

実家であるスウェル子爵家は、予定通りに爵位も邸も親戚である叔父様が継いだため、私が子爵家にいる理由がなくなつた。

そんな私に夫からの使いが来て、王都の街外れの屋敷が用意してあると聞かされた。行くところのない私には十分なものだった。

元々スウェル子爵家は裕福な家ではないけど、アクスウィス公爵家の援助のおかげで以前よりも余裕ができていた。今もスウェル子爵家への援助は続いているだろう。

お父様の跡を継いだ叔父様は、裕福になったスウェル子爵家を継いで喜んでいて。

スウェル子爵家への援助の中には、私へのお金もあったと聞いていたけど怪しいものだった。

お父様は「フィルベルド様からだよ」と言つて毎月定期的に渡してくれていたけど、お父様がいる間はアクスウィス公爵家のおかげで何不自由なく過ごせていたし、妻の役目も果たせない私には彼からのお金を使うことに抵抗があつた。

(元々、派手な性格じゃないし、使い道もないのよね)

そうして、お父様がなくなった私は貯まっていたお金を持つて夫の用意した屋敷に引っ越した。だが、スウェル子爵家を出たあと、フィルベルド様からのお金は途絶えた。

やはり、私へのお金ではなかったと思い知らされた。夫婦生活もない私に、フィルベルド様はお金を送る気にはなれなかったのだろう。

屋敷だけ用意して、一度も来ない夫。家に帰れないほど忙しいのだろうか……

そう思えば、本当に結婚しているという自信もない。

それでも、『今度会う時にはハンカチをお渡ししますね』と言つたのは自分だから、お互いの家紋入りのハンカチをポケットに入れて持つて来ていた。いつでも、渡せるようにと。

顔もおぼろげな夫からの儀礼的なハンカチに思い入れなどない。それで鼻水を拭いた。

「くしゅん……っ」

肌寒いせいか、もう一度くしゅみをした拍子にハンカチがはらりと落ちた。

落ちた先はバルコニーの外側。かろうじて金具に引っかかっている。

(ハンカチなんかほつとこうかなあ……)

そうは思うが、たつたいま鼻をかんばかりのハンカチにはしっかりと私の鼻水がついている。さすがにまずい。しかも、家紋入りのハンカチだ。だんだんと青ざめてきた。

このままハンカチが飛んで行つて、庭でこの鼻水つきのハンカチを拾われたら絶対に私のものとバレる。何せ、公爵家の家紋入りなのだ。血の気が引く。

『アクスウィス次期公爵夫人の鼻水つきのハンカチが落ちていました』、なんて届けられたら恥ずかしさで死んでしまう！

嫌すぎる。果てしなく取りに行きたくない。かといって、誰かに鼻水つきのハンカチを取つてくださいと、お願いもできない。仕方なくバルコニーの中から必死で手を伸ばした。だけど、届かない。

バルコニーの手すりを乗り越えて、外側の出っ張りに下りるしかないと悟る。

(落ち込んでいたのに、なんでこんなことに……)

憂鬱な気持ちでバルコニーの手すりに身体を上げた。

「やめろ!! 危ない!!」

いきなり後ろから大声で叫ばれて驚き、バルコニーの手すりによじ登った身体がぐらりとした。その瞬間、いきなり身体を引き寄せられて誰かの手がかつしりと捕らえられた。おそろおそろその手の持ち主を見上げる。

焦った表情に鋭い目つき。それでいて端整な顔つきの金髪碧眼(へきがん)の男性と目が合った。

「君は何をしているんだ!? こんなところで自殺をしようとするなんて……!」

バルコニーの手すりから軽々と引き寄せられ、男性のがつしりとした腕の中で言われた。

(……自殺?)

自殺しようなどとは露ほども思っていないくて、まさかの勘違いに絶句した。

「さっきから思いつめた様子だったから、おかしいと思えば……何を考えているんだ!?」

男性の腕の中でいきなり叱られたが、私はそれどころではなかった。

（ハンカチ！ 鼻水つきのハンカチが取りたいんです！ この間にも、鼻水つきのハンカチがどこかに飛んでいってしまうかもしれない!）

視線の先のハンカチが、バルコニーの外側に引っかかってパタパタと風になびいている。

（どうしましょう!? 飛んでいく!? ハンカチダイブ!? どこに飛んでいくの!?）

「なんで自殺なんか……どうするか……」

（どうもしなくていい! どうもしなくていいからほっといて!!）

真剣に悩む男性に今すぐに叫びたい気持ちをぐっと堪えた。

「は、離してください……!」

軽く持ち上げられた私の背後から両腕を回されて、背中が彼にピッタリと密着している。恥ずかしすぎて振り向けない。腕から抜け出そうとして、足が浮いたままバタバタともがいていた。

（早く、どこかに行ってほしい）

とにかくこの男性に離してもらうにはどうすればいいか、引きつりそうな顔を両手で隠し考えた。鼻水つきのハンカチを隠すためには、私が慌ててはまずい。とにかく落ち着いて話さなくてはと、息を呑み込んで淑やかに話すことにした。

「あの、自殺しようとしている訳ではないのです。ですが、一人になりたくて……どうか、察してください。それに、人に見られては困りますので下ろしてただけませんか……」

白い結婚とはいえ、私は既婚者。しかしながら、『ご主人を連れて来よう』と突っ込まれても夫

がどこにいるかも、それどころか顔をすらわからないのだから詳しくは話せない。

言葉を選びながらしおらしく俯くと、視線の先のハンカチがはらりと飛んでいった。

（ひいひいひい……!）

庭には警備員がいるはず。そこにいる誰かに拾われると思うと、全身の血の気が引いた。

（勝手にダイブしないで! ハンカチめ!!）

「あのっ……本当に下ろしてください! お願いします!」

一刻も早く庭へと行きたくて必死で抵抗した。彼は無言で丁寧に私を下ろすと、まだ何か言いたそうだった。だが、私はもうそれどころではない。

背中から汗がダラダラ出そうなほど焦る。目の前の男性には、見つめられている。いたたまれない。だけど、男性をこれ以上心配させないようにゆったりと微笑んでみせた。

これで、もう大丈夫だとわかってくれるはず。だけど、男性は視線を逸らさずに私を見下ろしている。先ほどから、私を凝視する彼に困ってしまう。

「で、では、失礼いたします」

一礼して、名前も知らない彼から急いで離れた。

そのままドレスのスカートをもち、慌てて庭に出られる場所を探しながら廊下を走る。

（一体、どこからハンカチがダイブした庭に出られるの!?）

六年ぶりの再会。こんな地味な令嬢が妻だとわからないかもしれないから、証拠にもなると思っ
て持って来たのが裏目に出ている。

（まさか、見ず知らずの方に自殺未遂の疑いを掛けられるとは!）

そのうえ、この夜会会場は意外と広い。

(庭は!? 庭はどこー!?)

「君は先ほどから、何をしているんだ?」

廊下をキョロキョロと見渡していると、また後ろから声をかけられてびくつと肩が揺れた。おそるおそる後ろを振り向くと、いつの間にか先ほどの男性が私を訝(いづか)しむように立っていた。

「まさか、自殺する場所を探しているのではないだろうな」

「ち、違います。その……庭に出たくてですわね……」

「庭に? 庭で何をするつもりだ?」

さつきから、つけられていたんだろうか。自殺を止めようとしている真剣な顔に見えることこの上ない。

きちんと説明しないとずっとつけられそうな気がしてきて、仕方なく話すことにした。

「……じ、実はですね。大事な物を庭に落としてしまって……庭に出るところを探しているのです」

「そういうことなら、早く言ってくれば……一緒に探そう」

良い人だけど、一緒に探されては困るので拳に力が入る。

(それが嫌で、さつき別れたばかりなのに……!)

その時、彼が少しだけ足を止めて入り口付近を寂しげに見た。

「……どなたかと待ち合わせでしたら、私のことは気にせずに行ってください」

「……待ち合わせはしていたが……庭はこちらだ」

「すみません」

彼はすぐにキリッと顔を引き締める。そんな彼に観念して案内されるまま、項(うなだ)垂れて静かについて行った。

彼の案内で暗い庭に出ると、街灯の灯(あか)りを頼りに早速ハンカチを探した。

(何としても鼻水つきのハンカチは私が見つけなければ……!)

必死で庭の垣根をかき分けて探していると、私の後ろで一緒に探している男性が何かに気づいた。

「あそこに白いものが見えるが……」

男性の視線の先にはバラの植木がある。そこに、白いハンカチが引っかかっていた。

「これか?」

彼がハンカチを取ろうとして近づいて行くが、彼よりも先に取らなければと焦った。急いで走ると、彼は無表情のまま立ち止まった。

「そのハンカチで間違いないのか?」

「は、はい! すみません! 慌ててしまって……大事なものですから、つい……」

大事なハンカチなのは間違いない。六年間、夫婦で生活したことない夫と私を繋(つな)ぐ唯一のものだ。しっかりとハンカチを握りしめる私を見て、彼はホッと息を吐いた。と思えば、なぜか私をジッと凝視する。

こんなふうに誰かに突き刺すような視線を向けられたことがなくて、ちよつと怖い。ほんの少しだけ後ずさりする。

鼻水つきのハンカチが誰にも見られなかったことに安堵(あんど)して彼に頭を下げた。

「ありがとうございました。おかげで大事なハンカチが見つかりました。申し訳ありませんが、待ち合わせをしているのでこれで失礼いたします」

「待ち合わせ？」

「はい」

「……………そのハンカチは、大事なもののなか？」

「はい。大事なものですけど……」

ジッとこちらを見る男性が、フィルベルド様の姿と不意に重なった。フィルベルド様も金髪碧眼^{へきがん}の見目麗しい方で、怖いくらいこんなに無愛想だった。違うのは、心配している眼だ。この男性の瞳は、あの時のフィルベルド様みたいに冷たくない。

彼を見ていると、少しだけ思い出した。六年前のバラ庭園でフィルベルド様に「邸^{やしき}に戻ろう」と言われた時、眉間のシワが消えていたような気がする。戻る時は後ろをついて歩いたから、本当にそうだったかどうかは自信がないけど。

「そうか……………くれぐれも危険なことをなさらないように……」

まだ自殺未遂という考えが捨てきれないのか、男性が心配げに言うとすぐに目を逸^そらした。

待ち合わせをしていたと言ったから、お相手の女性でも探しに行きたいのだろう。

ハンカチの落ちた庭に案内する直前に一瞬だけ見せた寂しげな表情は、約束の方を待ちわびている顔だった。私も夫に『やつと会えた……』と彼に待ちわびてほしい。そう思う時もあった。この夜会に来るまでは、少なからずそう思う気持ちは残っていたのだ。

でも、もう違う……………夫は姿を現さない。

(もう終わりね……)

悲しい想^{おも}いでハンカチに力を込め、握りしめたままそっとポケットに入れる。ポケットにはフィルベルド様に渡すはずだった私が刺しゅうしたハンカチもある。

そして、白い結婚の終わりを決意すると目の前が白く歪^{ゆが}み、私はぐらりと倒れた。

眠い眼^めをこすりながらうつすらと目覚めた。少し眠っていたらしい。

身体がだるい。頭はボーっとするし、汗をかいたせいか寒気もする。完全に風邪を引いてる。

「……………大丈夫か？」

気分が優れないと思いながら身体の向きを変えて天井を向くと、ベッドサイドから男性の低い声がした。はつきりと目を開くと、天井も周りの調度品や壁紙も見ることがない。

身体を起こして、おそるおそる声のした方に視線を移すと、金髪碧眼^{へきがん}の美丈夫が心配そうに私を見ており目が合った。

(…………なぜ!?　なんでこんなところに金髪碧眼^{へきがん}の美丈夫が!?　この方はさっきの方では!?　どこまで付いて来てるの!?)

「わ、私……………」

「体調が悪かったのか?　すまない」

男性がベッドサイドから手を伸ばしてくると、彼の意図がわからなくてその手から離れた。

「ち、近づかないでください、私は、こう見えても既婚者です」

シャツでつつさに身体を隠すように膝を立てた。不貞をする気はなくて、慌てる私をほんの数秒

だけ無言で見た彼が、その手をグツと握りしめて下げた。

「……君は、ディアナじゃないのか？」

「……名乗りましたっけ？」

私は、夫がいらないのに一人で夜会に参加する気になれなくて、社交界にはほとんど出ていなかった。社交界で、私は白い結婚だと笑い者だったのだ。

だから、この方とは自殺未遂の疑いをかけられた時しかお会いしてないと思う。

「俺に見覚えがないのか？」

「自殺未遂の疑いをかけられましたけど？」

「そうではない。しかし、なんで自殺なんか……」

彼は、悲しげにまたベッドサイドに腰を下ろした。

「いや、ですから……」

自殺じゃないし、鼻水つきのハンカチを取ろうとしただけ。それを、どうやって綺麗な話にできるのか悩んでしまう。

金髪碧眼に、眉間のシワ。寡黙な方にも見えて、またフィルベルド様の面影と重なりそうになったその時、ノックの音が聞こえた。ドアが開いて、騎士団の正装をした茶髪でたれ目の男性が入ってくる。

「団長。殿下がお呼びです」

「……挨拶は妻と行くと言っていたはずだぞ」

「例の件ですから、奥様には待ってもらった方が……」

私を助けてくれた金髪碧眼の彼は、今までにないほど不快感を現した。団長と呼ばれていたから、この茶髪の男性の上司なのだろう。

「わかった……すぐに行く」

茶髪の男性は、金髪碧眼の男性の返事を聞くと、私を見て一礼をして出ていった。

「少し、用事ができた。君はここで休んでいてくれ。すぐに戻るから」

「私はもう大丈夫ですので、すぐに失礼いたします」

「先ほど倒れたばかりだ。休まない……気にせずに、ここで待っていてくれ。では、失礼する」
優しい言葉を残して、彼は急いで部屋を出ていった。

部屋に一人残されたけど、私に彼を待つ理由はない。私が待っていたのは、夫のフィルベルド様なのだから。だけど、その夫には会えなかった。

憂鬱な気分ベッドから下りて、夜会用の踵の高い靴を履いた。

私を心配してくれた彼に迷惑などかけられない。

それ以上に、夫ではない男性とベッドのある控え室にいることはよろしくなくて、『ありがとうございました。ディアナ』と、その場にあったメモ用紙に一言書いた。そうして、彼を待たずに部屋を出た。

控え室を出て夜会会場の入り口付近に行くと、先ほどの金髪碧眼の男性がクリーム色の髪の女性と腕を組んで歩いていった。しかも、いつの間にか衣装まで替えて。もしかしたら、あの金髪碧眼の男性がフィルベルド様かもと少しは思ったけど、すぐに違うとわかる。

「奥様と殿下に挨拶に行くと言っていたから、あの方が奥様ね……やっぱり違いわ」

フィルベルド様ではない。夫に再会できない悲しさで、ポツリと呟いた。そうして、馬車へと向かった。

馬車に乗って悲しい気持ちで帰ると、夫の用意した屋敷はいつも通りの静けさだ。妻と思われてない私が住んでいるのかどうかわからない。使用人もいない、私一人しかない広くて冷たい屋敷は寂しいものだった。

（フィルベルド様にやつと会えると思ったのに……）

離縁するか、白い結婚を続けるかと迷っていた。

フィルベルド様に再会しても恥ずかしくないように、頑張つてドレスを着て行った。少しでも、地味な私が綺麗に見えるようにと……だけど、フィルベルド様は私に会いに来なかった。

顔を合わせることもない白い結婚。

誰もいない冷たい屋敷を見渡せば、これ以上フィルベルド様を頼つて独りぼっちの結婚を続けようとは思えなかった。

自分の部屋に戻るなり、光沢のある靴を脱いだ。ドレスを脱ぎ捨ててソファに雑にかけた。

下着姿のまま大きなトランクを衣装部屋から出して、普段着と日用品を詰める。最後に、机の引き出しから封筒に入つた離縁状をバッグに入れた。

いつものワンピースに着替え、ブーツを履く。

「もうここには帰らないわ……」

トランクを持って、誰もいない屋敷に告げた。そうして、私は玄関の扉を開けて静かに夫の用意した屋敷を去った。





「殿下……」

「フィルベルド。すまない……」

第二王子であるアスラン殿下が、ソファにぐったりとたれたまま力なく言った。

フィルベルド・アクスウィス次期公爵である自分は第二騎士団の団長を務めていた。

第二騎士団は殿下の警護に当たる騎士団で、アスラン殿下に付いている。

その彼が、六年前に密かに毒を盛られた。一命はとりとめたが、暗殺を警戒して一時的に城から出ることが決まり、第二騎士団が彼を連れて隣国ゼノンリード王国へと行くことになった。

表向きは外交と留学のため。真相は、第二騎士団がアスラン殿下をヴェレス王国から逃がしたのだ。

そうしてアスラン殿下は、自身の母君の故郷であるゼノンリード王国にしばらく身を寄せることとなり、六年という月日が経った。

六年ぶりの帰国。ディアナに会えるのを心待ちにしていたのに、帰還が遅くなってしまったせいで彼女との再会も遅れていた。

アスラン殿下は、自分が妻のディアナを連れていつまでも挨拶に来ないから、いまだに彼女を探していたと思ったらしく申し訳ないと謝っていた。

「アスラン殿下。今日はどうぞこのままお下がってください」

「妻には会えなかったのか？」

「見つけましたが、心配なんです」

ディアナはあんなところで自殺をしようとしていた。何が彼女をそこまで追い詰めたのか。もしかしら、俺がずっと放置していたからかもしれないと思うと、胸が痛んだ。

これ以上、彼女と離れて暮らすことなど考えられない。

「ルトガー。アスラン殿下をこのまま城の部屋にお連れしろ。俺が数分だけ挨拶に回って、そのまま疲れたとでも言って下がる。さいわい、今日はゼノンリード王国から帰ったばかりだ。不自然ではない」

先ほど迎えに来た副団長のルトガーに指示を出す。

「すまない。俺が不甲斐ないばかりに……」

「アスラン殿下のせいではありません」

ルトガーにアスラン殿下を任せて、あとは殿下の代わりに挨拶を済ますだけ。とにかく、早くディアナのもとに戻りたかった。

そうして、アスラン殿下の代わりに夜会を回り、すぐにディアナを待たせていた控え室に戻った。だけど、そこには彼女の姿はなく、置き手紙を読んで呆然とした。

「団長!! 大変です!!」

荒々しく扉が開き、ルトガーが血相を変えて飛び込んで来た。殿下に何かあったのかもしれない。が、自分はそれどころではなかった。

「ルトガー!! 大変だ!! ディアナがいなくなった!! すぐに捜してくれ!! さっきの可愛い女性

だ!!」

「その奥様のことです!」

「まさか、誰かに誘われたのか!? あんなに綺麗きれいになっていたから……!」

「違います!!」

ルトガーが力いっぱい否定する。

「屋敷が……団長のアクスウイスの屋敷が火事です!!」

「……っ!? ディアナは!! ディアナはどこだ!! まさか、帰ったのか!?」

衝撃の報告に控え室を飛び出した。厩舎きやうしやへ行くなり馬に乗ると、一目散に屋敷へと駆けていた。



王都のアクスウイスの屋敷を出て一晩た経ち、朝から街を歩いていた。

朝の気持ちいい風を感じながら歩いていると、何かを搜索しているような騎士たちの姿があちこちで目についた。

(何かあったのかしら?)

そういえば、フィルベルド様も騎士だった。この六年間一度も帰って来なかったことを思い出して、少しだけため息が出た。

(いや、もうフィルベルド様のことは忘れよう)

美味しそうなパンの匂いに気づいて騎士たちから視線を逸そらすと、喫茶店が目についた。いい匂

いにつられて入ると、店内には人がたくさんいた。

ゆっくりお茶を飲みたくて外を見ると、テラスは少しだけ寒いせいか人がいない。

(今は、一人になりたいからテラスでいいわね)

美味しおいそうなパンとお茶を頼んでから、テラス席に座った。

テーブルに肘をついて街行く人を見てみると、騎士たちが聞き込みをしている。

(やっぱり、搜索かしら? 何か事件でもあったのね)

会話の内容は聞こえなくて、ボーっと騎士たちの様子を見ながらお茶が来るのをただ待っている
と、テラス席に誰かがやって来る気配がした。

「……ディアナ」

「はい」

名前を呼ばれて振り向くと、夜会で私に自殺未遂の疑いをかけた男性がいる。なぜここで再会するのかわからない私に、彼が近づいてきて跪ひざまずいた。金髪が眩まぶしく光っている。

やっと会えたと感無量な様子の彼を見て、私は突然の出来事に戸惑った。

「良かった……無事だったんだな。搜したんだ」

「さ、搜す? と、とりあえず立っていただけませんか?」

男性の背後には幾人もの騎士たちがついてきていた。テラス席のせいで、街行く人たちが端整な顔の彼に振り向いている。

(視線が、周りの視線が痛い!)

まるで物語の王子様のように、お姫様とは言い難い地味な私の手を彼が取った。いつの間にか私

たちの席は大勢の騎士たちに囲まれている。

困惑しかない私を、金髪の男性が愛おしそうに、それでいて心配げに見上げた。

「一晩中君を捜していたんだ。ディアナに何かあれば……」

「ど、どうなさったのです？ 私は今から朝食をいただくとしていただけですけど……」

「朝食？」

目の前の男性が跪いたままでフムと考え込んだ。悩む顔まで整っていて、私は意味不明な冷や汗が出た。

「……昨夜はどこにいたんだ？」

「友人の家を借りていますので、そちらに……とりあえず、立っていただけませんか？」

今にも上ずりそうな声を抑えて男性にお願いすると、彼はこの世の終わりのような形相で何とか立ち上がってくれた。

だけど、私には理由がわからず困惑してしまう。そんな戸惑う私の隣に彼が座った。

この状況にいたたまれない。会話もない。ほぼ初対面の騎士様と何を話せばいいというのか。困り果てて、何気なくお茶を勧めてみた。

「あの……良ければお茶でも……」

「嬉しいよ。君と一緒に朝食を摂れるなんて夢のようだ」

「そ、そうですか……」

私には眩しいくらいの整った顔でじーんと感無量に咬く男性を見ると、この人は一体何を言っているのだろうかと思う。私が疑問に思っている間にも、彼の行動は早かった。

すでに、そばにいた茶髪の騎士に上官らしい態度でお茶を頼んでいる。その間に私の頼んだお茶とパンがやって来た。

ウェイトレスは騎士たちの間を緊張しながらぐり抜け、すみませんと、こちらが言いたくなるぐらい恐縮しながらサーブしてくれた。

ダリオール型で焼いたパンに巣ごもり卵を乗せたものと温かいお茶を置くと、ウェイトレスは無言でお辞儀をして逃げるようにテラス席を去っていった。一刻も早く逃げたかったのがわかる。私も逃げたいから。彼は、私のパンとお茶を見ている。

「……ディアナ。朝食と言ってなかったか？」

私の朝食を見て、彼が驚いた。

「無駄遣いではできませんので……」

「ディアナ、何を言っているんだ？ ルトガー、メニューを持って来させてくれ」

「はい」

まさか、一緒に朝食を摂るんだろうか。この騎士たちに囲まれている中で？

い、嫌すぎる。しかも、彼は仕事仲間ではないだろうか。

「あの……朝食でしたら、先にこれを食べますか？ お仕事中ですよ？ 早くお戻りになった方が良いでしょうね？」

早くどこか行ってほしいと願い、自分が頼んだパンとお茶を差し出すと、彼は囁み締めるように感激した。何を考えているのか本当にわからない。男性の反応は私とは真逆だ。

「やはり俺が思った通りの女性だ。優しく思いやりがある」

「なんの話ですか？」

先に朝食を食べてもらおうとしただけで、そんなセリフが出てくるとは……誰かこれを説明してほしい。騎士たちをちらりと見ると、騎士たちは摩訶不思議なものを見るように目が点になっている。こっちも困惑しているのがわかる。

「ディアナにずっと会いたかった……何度この手に触れることを望んだだろうか……」

「ひゃっ……」

そっと手を取られて熱っぽい眼差しを向けられると、いきなりのことに心臓が跳ねた。

「ダメですよ!! 私には夫がっ……」

白い結婚とはいえ、不貞をする気なんかない。手を離そうと慌てると、騎士は真剣な眼差しで握りしめた手に力を入れた。

「俺がわからないのか？ ディアナ……俺がフィルベルド・アクスウィスだ」

「……………は？」

突然の告白に息が止まる。変な声が出ている自覚もなく、思考が止まった。

「ディアナ。どうして昨夜は突然いなくなったんだ？ それに、自殺なんかしようとして……何が君を悩ませているんだ？ 君のためなら、邪魔なものは全て排除しよう」

わけのわからないことを言いながら、フィルベルド様が色っぽく私の手を唇に引き寄せて愛おしそうに触れる。

（排除って一体何を排除する気なのですか……そんなことよりも!!）

「あなたが……フィ、フィルベルド様!? そんなはずは……!?」

「俺が、君の夫のフィルベルドだ」

似ているとは思った。金髪碧眼に鋭い瞳。整った顔。確かに昨夜、フィルベルド様と姿が重なりかけたけど……

「昨夜は、奥様と寄り添っていたじゃないですか!？」

「なんの話だ？ 妻はディアナだけだ」

「だって……夜会で……」

女性と寄り添っていたのをしっかりとこの目で見た。だから、似ていたけど夫のフィルベルド様じゃないと思った。絶対に見間違えじゃなかった。

夜会でのフィルベルド様を思い出している間にも、彼は慌てることなく淡々と私の朝食を頼んでいる。

「ディアナ。食事はすぐに来る。一緒に食べよう」

「この中で、ですか!？」

周りには騎士たちが整列しており、まるで要人のような朝食に戸惑う。まわりからの視線が気にならないのか、フィルベルド様は私をずっと見つめている。

卵に乗ったパンだけを食べようとしていたのに、あっという間にフィルベルド様が私のために頼んだシードケーキがやってきた。

手を取られたままで美味しそうなシードケーキを見ると、フィルベルド様は笑みを溢して私の手をやっと離してくれた。

「パンが一つじゃ足りないだろう。お茶も飲んでくれ」

「あ、ありがとうございます」

今しがた判明したばかりの夫からの優しさに戸惑う。お茶を飲みながら、ちらりと目線を上げると、フィルベルド様は嬉しそうにお茶を飲んでいる。

……私の隣で優しく微笑むこの金髪碧眼の男前は一体誰だろうか？

なぜ、私は騎士たちに見守られながら朝食を摂っているんだだろうか？

仕草もスマートで、お茶を飲む姿さえ絵になるこの男性が本当に夫なのだろうか？

フィルベルド様は、確かに見目麗しい方だった。でも、こんな素敵な笑顔は見たことがない。

私の記憶は一体どうなっているんだろうか……わからない。

すると、フィルベルド様が急に私に振り向いた。彼に見られると、緊張のせいでどきりとしてしまう。

「お茶は甘いものが好きなのか？ 他には何が好きなんだ？」

「お茶は、なんでも好きですけど……どうして私を捜していたんですか？ 私が、フィルベルド様に気づかなかったからですか？」

それなら、申し訳ないけど。十四歳で一度だけ、しかも短い時間お会いしただけで、顔がおぼろげだったのだからどうか許してほしい。

すると、フィルベルド様がカップを静かに置いて神秘的な面持ちで話し始めた。

「ディアナ。実は、昨夜俺たちの屋敷が全焼したんだ。夜会に君の姿もないし、自殺をしたのかと思つたが、遺体の一つも見つからなかったから、もしや攫われたのかと思ひ騎士団で捜索していたのだ。見つかつて本当に良かった。ディアナがいなくて生きた心地がしなかった」

フィルベルド様の衝撃の発言に、私は目がぎょつと見開いて声が上ずった。

「……………ぜ、ぜぜ、全焼!? なんて!？」

昨夜はフィルベルド様に会えなかったから、離縁を決意して屋敷を出た。

「ど、どうして全焼に？ 火の気はなかったはずです!」

私は、夜会から帰つてすぐに着替えて屋敷を出たから暖炉一つつけていない。お湯だつて沸かしていないのだ。

自然に火がつくなんて有り得ない。まさかの放火の二文字が脳裏をかすめる。

そう思うと怖くなる。あの屋敷にいれば助かったかどうかともわからない。思わず動揺して、カップを持ったままの手が震えた。

「ディアナ。怖がらせるつもりはない。君のことは必ず守ろう」

私の動揺に気づいたフィルベルド様が、私の手を包み込んだ。その手は優しくて温かい。

「……フィルベルド様。私、なんとお詫びすればいいのか……」

離縁しようとは思っているけど、屋敷を守れなかったのは私のせいで彼に申し訳なくなる。

「ディアナ、震えている。すぐに休もう！ 君は目が離せない!!」

「いや……あのですね……」

勢いよくガタンと立ち上がったフィルベルド様は、あつという間に私を抱きかかえた。

「すぐに帰ろう！ こんな時にお茶なんかしている場合じゃない!」

「キャア！ やだ！ 下ろしてください!」

「こんなに震えているじゃないか！ 歩くのは危険だ!」

「だって私には夫が……！」

「夫は俺だ!!」

(そうでした！ この金髪碧眼のイケメンが夫でした。先ほど判明したばかりだけど!! しかも、歩くことの何が危険!?)

衝撃の事実が頭がいっぱいで震えているのは間違いないけど、こんなことで抱きかかえられなければならぬほど私は弱いのだ。

「ディアナ。君は最愛の人だ」

(一体いつから!?)

うつとりとした艶顔でフィルベルド様が見つめる。わけがわからない。血の気が引いたまま、抱きかかえられた私の動揺に行き場はなかった。

「さあ、行こう」

混乱する私を抱きかかえたフィルベルド様が、喫茶店の中を出口に向かって突き進む。

フィルベルド様の行動力がわからないまま、私は彼の馬に乘せられてどこかに連れて行かれた。

お城の一室で、私は柔らかいソファに座っていた。隣には、見目麗しいフィルベルド様が頬杖を置いて私を凝視している。

(なぜ私は、こんなところにいるんだろう……)

何度考えてもわからない。

離縁を決意して、屋敷が全焼したら夫が現れた。正確には、夫が誰か判明したのだが……

そして今朝、フィルベルド様に確保されて王城へと連れてこられた。

(どうしてこんなことに……)

「ディアナ」

「はい」

名前を呼ばれて、返事をしながら彼を見る。

「新しい屋敷は近いうちに準備しよう。それまでは、どこに住みたい？ 何か希望があればなんでも聞こう」

優しい眼差しでフィルベルド様が聞いてくるが戸惑ってしまう。屋敷は全焼したし、今さらどんな顔をして一緒に住めばいいのかわからないのだ。

この顔に見つめられっぱなしの私の緊張も計り知れない。私には、恋愛経験がない。イケメン耐性もない。社交界にすら、ほとんど出てないのだ。

「……家は友人の持っている家を借りていますので、私はそちらに住みます」

「家を借りている？ どうしてだ？」

妻が隠れて仕事をしているなんて、夫は良く思わないだろう。

それに、私の秘密は言えない。自分でもよくわからないし。

「ええーと、フィルベルド様はお仕事ですよ？ 私はそろそろ帰りますね。でも、また明日にでもお会いできますか？」

今は、離縁状を持って来てない。そのうえ、私を捜してくれてみたいだから、ちょっと話しくくて笑って誤魔化した。

「ディアナのためなら、毎日でも会おう。二度と離れない」

「そ、そういうことではなくてです」

また、おかしな発言をし始めた。だけど、離縁の話は必要だ。夜会で他の女性と腕を組んでいたし、ずっと帰って来なかったのだから恋人だっているだろう。彼に恋人がいるなら尚更早く別れるべきだ。

早く帰ろうと私が腰を上げようすると、フィルベルド様は寂しそうな表情を見せた。どきりとして、立ち上がるタイミングを逃してしまう。

「やっと帰って来たんだ。これからはずっと一緒に暮らせる。そのためには、屋敷を準備しなければならん。火事の詳細も調べねばならん……今日は仕事が終わるまで、ここにいてくれないか？」

「ここはお城ですよ」

「問題ない。俺のまともめている第二騎士団は、主にアスラン殿下の護衛が仕事だ。第二騎士団の屯所はこの城にあるから、この部屋に妻である君がいても問題ない」

「まともえている？」

それは、職権乱用では？ いやその前に、不遜な言葉、いや、私には似つかわしくない言葉が出てきた。私が騎士団長の妻なんて信じられない。一体、いつから私は要人の妻になったのだろうか。

「父上から、聞いてなかったのか？ 今は、第二騎士団の団長を勤めているんだ」

お義父様が、『フィルベルドが出世したようだ。これでますます帰れない。せっかく結婚したのにすまない』と言っていた気はする。

フィルベルド様は、初めてお会いした時に『一緒に住めない』と言っていたから気にもしなかつ

た。『出世して良かったです』と私が言えば、お義父様は誇らしく笑っていた気がする。

（それが、こんなに出世していたなんて……）

自分の夫が次期公爵様で騎士団の団長の一人を務めているとは予想もしなかった。離縁を考えているけれど、夫が誇らしい。そのうえ、この誰もが目を引く外見だ。私とは、釣り合いが取れなさすぎる。

とてもじゃないが、私の夫とは思えない。困惑する。今も、彼は愛おしそうに私から目を離さない。さらに困惑する。

「今夜は城に泊まるうかと思う。だが、ディアナが気に入らないなら、どこか宿でも手配しよう」

「や、宿？ 大丈夫です！ 私には借家がありますから……フィルベルド様は、お気になさらず。また明日どこでお会いしましょう！」

フィルベルド様が一瞬ムツとしたかと思うと、彼の手が私の頬に伸びた。思わず、びっくりした。「もう離れて暮らす理由はない。……俺は毎日ディアナと一緒にいたいんだ」

この人は一体誰だろうか。こんなに切ない視線を向けられる理由がわからない。

（——逃げたい!!）

「それに借家はどこだ？ ディアナがそこが良いなら、そこに二人で住もう」

「……つええ!? それは、ちよつと……すごく狭いので……」

知られたくない。あの家で一緒に住む気はない。貴族が住むような邸ではないのだ。

（それはまずい。とにかくまずい）

「そうだな……ずっと離れていたから、いきなりでは困るか……安心なさい。無理にはしない。」

ディアナの気持ちが一番だ」

「あ、ありがとうございます……」

一体何に納得したのかわからないけど、まさか押しかけてくることはないだろう。多分。意味不明な様子だけど、常識は消えてないはず。

「では、今夜は宿を取ろう。すぐに手配させるから、それまではここで待っていてくれるか？」

ソファの背もたれにフィルベルド様の腕が伸び、それだけで緊張して身体が強張る。突然襲い掛かってくることはないだろうと信じたい。

フィルベルド様の熱視線が恥ずかしすぎて、赤くなりそうな顔を隠すためにソファから立ち上がった。声が上がらず。

「フィルベルド様は、お忙しいですよね？」

「そうだが……心配しなくていい。ここなら、すぐにディアナの様子を見に来られるし、この部屋でできる仕事は持つて来させる」

満面の笑みで恐ろしいことを言い出した。

（すぐに様子を見に来るって……それは、フィルベルド様の監視付きでこの部屋で何もせずにいると!?）

そんなのまるで拷問だ。

——何度も思うが逃げたい。

——離縁状をすぐに取りに帰りたい。

一刻も早くこの場を離れたくて逃げようすると彼も立ち上がり、私の手を取って包み込んだ。

「ディアナと今夜から一緒なんて夢のようだ……」

むしろ、夢だといい。

一度しかお会いしたことないけど、こんなセリフを口にするなんて私の知っているフィルベルド様じゃない。

「今夜の夕食も楽しみだ」

今夜の晩餐に感無量になっているフィルベルド様が私を愛おしそうに見つめる。顔が良すぎる。私を見つめるフィルベルド様の隣にいるのは、そろそろ本当に限界だった。

やっとフィルベルド様が仕事に行き、私は城の豪華な部屋に残された。

フィルベルド様は私を気にしているような素振りを見せるけど、私には彼に好意を向けられる理由などない。私は一目惚れされるような美女でもない。どこで好意をもたれたのか、意味不明だった。

そうはいっても、このあとの晩餐にはドレスが必要だ。フィルベルド様に恥をかかせるわけにはいなくて、困ってしまう。

「失礼いたします、奥様。フィルベルド様の部下のルトガー・ケインズといいます。第二騎士団の副団長を務めています」

ノックの音がして、礼儀正しく入って来た茶髪の男性が一礼する。

「……奥様？」

聞きなれない言葉に、私は首を傾げる。

「フィルベルド様の最愛の奥様と伺っております」

(……誰が？ 誰がフィルベルド様の最愛ですか?)

自分の耳に自信がなくなるほど、私とは関係ないワードに聞こえる。

「ルトガー様。どうか、ディアナとお呼びください」

「かしこまりました。では、ディアナ様……と」

フィルベルド様よりも柔らかな笑顔で返されて、人当たりのよさそうな青年に見えた。

「何かご用はないかと、お聞きにきました。欲しいものがあれば、すぐに手配いたします」

「欲しいものはありませんが……少し外出しても？ 夕食には、必ず帰りますから……」

「では、ご一緒いたしましょう。フィルベルド様は、少し席を外せませんので」

「いえ、一人で行きます。お仕事のお邪魔をするわけには……」

「屋敷のこともありますし、ディアナ様に何かあれば大変です」

それだけ言うと「では、行きましょう」とルトガー様が扉を開ける。それで私は仕方なく、彼と部屋を出た。

城から出るために通る外廊下は庭に面していて風通しが良く、清涼な風に少しだけ気持ちや和らいだ。それに、朝よりも温かい。

よく整えられた庭を見ていたら、フィルベルド様とアクスウィス公爵邸のバラ庭園を歩いた六年前のことを思い出した。

金髪碧眼で、冷たい印象だったことはすっかり覚えている。その他は、何かあったらどうかと首を傾げた。そんな私を見ていたルトガー様が話しかけてくる。

「この庭は、騎士たちがよく休憩に使ったりもします。奥にはガゼボもありますから、今度フィルベルド様とご一緒すると良いですよ」

「フィルベルド様はお仕事がありますから、お邪魔はしません」

そもそも、フィルベルド様は最初から私と一緒に住む気はなかった。今は、きっと屋敷が全焼したから気にしているだけだと思う。私たちにはお互いを知る機会はなかったのだから、私がルトガー様の言う「最愛の奥様」であるはずがないのだ。

そのまま外廊下を進み馬車乗り場に行くと、一組の男女が目付いた。

クリーム色の髪を巻いている綺麗な女性を、金髪の男性がエスコートしている。

(フィルベルド様だわ)

フィルベルド様の出した手に、女性がそつと手を乗せて馬車に乗り込んだ。

(やっぱり、私に好意があるというのは勘違いね)

フィルベルド様のそばには綺麗な女性がいる。きっと、昼食もあのご令嬢とご一緒したのだと思うと胸がチクンとした。

「あれは……」

「ああ、アスラン殿下の見舞いに来られていたご令嬢です。お見送りをしていますね」

「殿下の？ ……わざわざお見送りをされるんですね」

「あの方は公爵令嬢ですし、部屋で寝込んでいると思われるたくないでしょう」

確かにアスラン殿下じゃなくてフィルベルド様がお見送りをすれば、アスラン殿下は部屋で休める。でもどうしてフィルベルド様なのだろう。

お見舞いに来た一人の令嬢を騎士団長自らが見送るなんて、ちょっと考えられない。

「……フィルベルド様は、人気がありませんでしようね」

「すぐく人氣がありますね。あの容姿に騎士団の団長でありながら、次期公爵ですから……ですが、気にすることはありません。寄って来る女性は大勢いますけど、フィルベルド様にはディアナ様がいますから」

「私たちは、白い結婚です」

やはり、フィルベルド様とは早く離縁するべきだ。彼には女性がいる。私がいるせいで結婚できないのかもしれないと思うと、重くなる胸を手で押さえた。

どうして好意があるような態度を取るのかわからないままルトガー様と、フィルベルド様が見送った馬車を見ていた。

令嬢の馬車が見えなくなりフィルベルド様が踵を返すと、私とルトガー様に気づいて彼の足がピタリと止まる。ルトガー様と同時に私も頭を下げた。フィルベルド様は、それを見て早足にどこかへ行ってしまった。

ルトガー様と馬車に乗り連れて来てもらったのは、リンデイス伯爵家の王都の別邸^{タシハリス}。アクスウィス公爵家ほどではないが、リンデイス伯爵家も大きな邸^{やしき}だった。

馬車に着くと、すぐに執事と下僕^{フットマン}が迎えてくれる。

「こちらは、リンデイス伯爵家ですよね？ ご友人ですか？」

「はい。幼馴染^{おとななじ}みがいるんです」

下僕^{フットマン}が開けた馬車の扉からルトガー様と降りると、執事がいつも通りに邸内に招き入れてくれた。「お嬢様。ご無事で何よりです」

「心配してくれていたのね……ありがとう」

昔から、友人のイクセルがいるこの邸^{やしき}に遊びに来ていたから、執事とも旧知の仲だった。

いつも優しいイクセルの執事は、フィルベルド様の屋敷が全焼し騎士団に私が搜索されていたから、心配してくれたようだ。

「それで、イクセルに会いに来ただけだ……」

「イクセル様でしたら」

そう執事が言いかけたところで、その本人が心配そうにやって来た。

「ディアナ。良かった……無事だったんだな。屋敷が全焼しても、死者がたと聞いてないから、どこかにいるものだと思ったが……捜しに行こうかと思っていたところだったんだ」

「心配させてごめんなさい。でも、良かったわ。イクセルが領地に行っていたらどうしようかと思ったのよ」

「帰ったのは先ほどだ。執事も心配して、家に様子を見に行っていたらしいぞ。途中で搜索が終わったみたいだから、見つかったのでは？ と今しがたまで話していたんだ」

「そうだったの」

「それよりも、こちらは？」

私の顔を見るなり安心したイクセルがルトガー様に視線を向けると、彼が笑顔で名乗った。

「お初にお目にかかります。フィルベルド様の部下である、第二騎士団に所属しておりますルト

ガー・ケインズです。本日は奥様のお供と一緒に参りました」

イクセルは、奥様というワードに驚いている。私を奥様という人どころか、これまでお供なんかいなかったからだ。

「フィルベルド様？」

「実は、夫が帰って来たのよ」

「良かったじゃないか。今度、ぜひ晩餐に招待したい」

「……今度ね」

再会後のフィルベルド様の行動を思い出すと、紹介することに気が進まない。むしろ、頭が痛い。そのうえ、私は離縁をしようとしているのだ。

「……とりあえず、今日の晩餐を何とかしなければと思ってイクセルに会いに来たのだった。イクセル。一番安いドレスを言うから、少しだけお金を貸してくれない？ ドレスも全部燃えちゃったから、一枚もなくて……もちろんいつもの仕事は手伝わ」

夫婦だけとはいえ晩餐にはドレスが必要だ。貴族は食事の度に着替えるのだ。面倒だけどそれが貴族の習慣。

持っていたドレスは屋敷と一緒に燃えてしまった。私には家族はいないしお金もない。頼れるのはたった一人の友人のイクセルだけだった。

「いつも仕事を手伝ってくれているから、ドレスぐらいいつでも買ってやるが……」

白い結婚のせいで夫にドレスの相談もできないのかと、顎に指を立てたイクセルが思案しながら言った。

そんな私たちの会話を聞いていたルトガー様が、ドレスの心配をする私を諫める。

「ディアナ様。ドレスを買うのに、お金をお借りする必要はありませんよ。フィルベルド様におっしゃればいいのです」

ルトガー様が軽快に言った。

だけど、私たちは結婚六年目の夫婦なのに相談し合うような関係ではない。それに屋敷を守れなかったことを考えれば、ドレスを買って欲しいなんてお願いなどできなかった。

「……フィルベルド様にご迷惑はかけられませんから」

「迷惑なんて思わないと思いますけど？ もしかして、こちらに来られたのはドレスを準備するためでしたか？」

「……今夜一緒にお食事を、と言われていましたから。フィルベルド様に、恥をかかせたくなくて……」

それに、フィルベルド様が見つめてくるから、ずっとあの部屋にいるのは限界だった。

「ディアナ様。ドレスは、フィルベルド様にお任せください。ディアナ様がお金を借りてまでドレスを準備したと知れば、フィルベルド様が悲しみます」

ルトガー様が優しく言うけど、落ち込んでしまう。白い結婚とはいえ今の私じゃ妻失格だ。

「ディアナ。こちらの方の言う通りだ。フィルベルド様がお帰りなら、俺じゃなくてフィルベルド様を頼った方がいい。金はいつでも貸してやれるから」

「そうね……ありがとう。イクセル」

イクセルが私を労る。しかし、あの甘く壊れそうなフィルベルド様を見れば、イクセルはどう思

うのだろうか。

(言動が、六年前と別人のようになっていいるのよ！)

しかも、ちょいちょい現れる女性の影。私の感情が追いつかない。だけど、イクセルの言う通りだと思えた。

「さあ、帰りましょう。フィルベルド様がお待ちですよ。奥様に会えるのをずっと待ち焦がれているのですから」

「そんなこと、あるわけないわ……」

ルトガー様が帰宅を促すけど、フィルベルド様が私を待ち焦がれているなんて有り得ない。

この六年、数少ないながらもフィルベルド様からの一方的な手紙も素っ気ないものだった。

『いつも同じ場所にいないから』とお義父様から聞かされていたし、フィルベルド様の仕事の邪魔をする気はなかったから、アクスウィス公爵家を通して私からの手紙を送ってもらうこともしなかった。

落ち込む私を心配そうに見送るイクセルに別れを告げて、リンデイス伯爵邸をあとにした。

そうしてルトガー様と一緒に城の部屋に戻ると、フィルベルド様が書類を部屋に持ち込んで仕事をしていた。

「ディアナ。息抜きはできたか？ 早く帰ってきてくれてよかった」

「はい……ただいま帰りました」

「ああ、おかえり」

おかえりと言われたのは久しぶりで、恥ずかしいながらもくすぐったく感じた。

「ルトガー。今日からアスラン殿下は三日ほどお休みになる。警護の手配は全て済ませたから、俺もその間は休むぞ。後は頼む」

「はい。定時報告には参ります」

「そうしてくれ。ディアナ、宿の手配はできたから一緒に行こう。ルトガーに仕事の話があるから、少しだけ待っていてくれ」

「はい。では、廊下で待っていますね」

「すぐに行く」

テキパキと書類を取って動き出すフィルベルド様は、いかにも優秀な感じた。思えば、二十四歳という若さで騎士団長についているのは異例のことではないだろうか。

夫が優秀すぎる。やはり、離縁をすぐにしなればと思いつながら廊下に出た。

憂鬱な気分が廊下で待っていると、フィルベルド様はほんの数分で出てきた。

「待たせてすまない」

そう言いながら、彼が私の肩を優しく抱き寄せてきてどきりとする。

「では、行こうか」

「はい」

戸惑いながらも、私は初めて夫と並んで歩き始めた。



馬車に乘せられて着いた先は、古くからある格式の高い宿だった。宿の前に馬車が停まって扉が開いた。フィルベルド様が降りると、私に向かって紳士的に手を差し出す。

「ディアナ、おいで」

「はい……」

なんだろうか。恥ずかしさもあるが、こんな対応をされたことがなくて緊張する。

馬車から降りると、支配人を先頭に何人もの従業員に出迎えられている。私は一体何者なのかと突っ込みたい。

「フィルベルド様。これは何ごとですか？」

「出迎えのことか？ 昔からアクスウィス公爵家を利用している宿だから、いつものことだが……」さすが、この国の有力な貴族のアクスウィス公爵家だ。

優雅な気品に溢れるホールで、フィルベルド様は堂々と支配人と挨拶を交わす。それに習い、私も淑女のように挨拶をした。

「荷物は部屋に？」

「はい。ご指示通りにお運びしました」

フィルベルド様は、支配人に確認している。落ち着いた顔を見て、やはりこれが私の記憶にあるフィルベルド様だと頷いた。意味不明な甘いフィルベルド様は何かの間違いだったと願いながら、彼に連れられるままに歩いていた。

支配人の案内で通された部屋は、大きなベッドのある豪華な最上階の部屋だった。部屋のテーブ

ルにはすでにウェルカムシャンパンが準備されている。それよりも驚いたのは、贈り物が積み重なっていることだった。

呆然としている私の横を通り過ぎ、支配人は静かに部屋を去っていった。

頭が真つ白になった。軋んだ人形のようにゆっくりと隣のフィルベルド様を見ると、ほんのりと笑みを溢している。

「ディアナへの贈り物を買っていたんだ。本当は屋敷に帰ってから並べるつもりだったが、焼けてしまったからな。ここには全部を持って来られなかったから、これはまだ一部なのだが……」

「買っていた!？」

「当然だ。ディアナへの贈り物をかかすつもりはない」

その言葉に冷や汗が出そうになった。

年に一度の贈り物。毎年、私の誕生日には、お父様が「フィルベルド様からだよ」と言って、髪飾りやネックレスなど何か一つ贈られていた。でもそれは、白い結婚をさせた娘を不憫に思ったお父様が、自分で購入して私に贈ってくれているのだと思っていた。そしてお父様が他界してからは、仕送りとともに贈り物は途絶えた。だから、余計にそう思った。

「……もしかして、毎年誕生日に贈り物を？」

おそろおそろ聞いてみる。

「もちろんだ」

まさか、お父様の言う通り本当にフィルベルド様からの贈り物だったとは！

最後の贈り物は、あの夜会で着ていた深紅のドレス。それも屋敷の火事で焼けてしまった。

「フィルベルド様。すみません……これまでに頂いたドレスもネックレスも、全てなくなっていました」

落ち込んでしまい、顔が上げられないでいた。

「ディアナのせいではない。それに、この目で見て選んだわけではないから気にするな。隣国にいて自分で渡せなかったどころか、要望を伝えるだけで自分では選べなかった。申し訳ないのはこちらだ」

私を氣遣うフィルベルド様は優しい。何一つ責めたりしない。今も、私への贈り物を手に取り始めている。

「ディアナが氣にいるものがあればいいが……自分の趣味には、自信がない」

何と返事をしているのかわからなくなり無言でいると、フィルベルド様が困ったように話した。

「……先ほドルトガーに聞いたが、晚餐ばんさんのためのドレスを自分で用意しようとしていたらしいな。だが、君は俺の大事な妻だ。ディアナになら毎日でも贈り物をしたい。そう思えるのは君だけだ」
真っ直ぐ私を見つめるフィルベルド様が嘘うそを言っているように思えなくて戸惑う。

「さあ、これに着替えてくれるか？　すぐに夕食だ。俺も着替えてこよう」

「はい……ありがとうございます」

見つめられながら大事な妻と言われて、顔が赤くなる。渡されたドレスが入っているであろう箱を両手で受け取ると、フィルベルド様が目尻を細めて微笑ほほえんだ。

「着替えたら迎えに来るよ」

「は、はい」

フィルベルド様は、後ろを振り返りながら去っていった。部屋に残された私は、広いベッドの上で大きな箱を開けた。落ち着いた黒っぽいドレスの裾には赤いバラの模様の刺しゅうが施されている。小さな箱にはバラの髪飾り。

「綺麗きれいだわ……」

胸に何かがじわりと広がった。潤んだ目尻をぬぐって、着替えなければと思い服を脱いだ。

ドレスを整えたあとは、髪飾りをして少しでも見栄えよく見えるようにした。

しばらくすると、部屋をノックする音が聞こえる。フィルベルド様だ。深呼吸をして扉を開けて彼を迎えた。そこには、見目麗しい彼がタキシード姿で立っていた。

「ディアナ。支度はどうだ？」

「はい、できました」

照れながら応えると、フィルベルド様が無言になり口元を隠した。顔を横に向ける彼を見て、支度が遅くて怒ってしまったのかと思い、おそるおそる聞く。

「あの……お待たせしましたか？」

「いや。ディアナ……本当に綺麗きれいになった」

私のドレス姿を見たフィルベルド様は、愛おしそうな様子で息を呑んだ。

「では、行こう」

フィルベルド様が腕をそっと開ける。その腕に照れながら自分の手を添えて、宿の中にあるレストランの個室へと行った。